

K-365

遊佐町金俣経塚(木製経筒出土)

——調査報告書——

1993

山形県遊佐町教育委員会



序

文

この報告書は、遊佐町教育委員会が、山形県教育委員会文化課をはじめ関係各位の援助をいただき、平成3年と平成4年の継続事業として、その調査結果をまとめたものであります。

わが町は、三崎山遺跡の青銅刀子、吹浦遺跡の吹浦式土器、杉沢遺跡の土偶をはじめ、鳥海山麓一帯に縄文遺跡が多く分布し、貴重な遺物が出土しています。

一昨年の夏、金保地区の採石作業場から、まったく偶然に「木製経筒」が発見され、その業者から届け出がありました。このことは、鳥海山の文化史に縄文より後代の史実を新たに加える上で画期的な発見であります。また、わが町中世の仏教普及の実態を知る、貴重な史料を提供した発見ともなりました。

さいわい、この貴重な文化財が関係各界の協力により、慎重に科学的な技術を用いての開筒調査と最も適した保存措置がなされました。今後、専門の調査研究はもちろん、広く町民の皆様にも公開でることになり非常に喜ばしいことであります。

おわりに、この報告書の作成を担当された川崎利夫、現地踏査された酒井忠一、菅原傳作はじめ多数の方々、透視写真撮影調査された宮城県多賀城歴史資料館の藤沼邦彦研究部長、開筒調査ならび保存措置など指導援助いただいた東京国立文化財研究所修復技術部第三研究室青木繁夫室長、発見した作業員斎藤富雄、届け出と出土品を提供いただいた斎藤工業斎藤勇治社長の皆様に深く感謝します。

平成5年3月

遊佐町教育委員会

教育長 阿部亮蔵

例 言

1. 本報告書は、平成3年8月山形県飽海郡遊佐町大字吉出字金俣において偶然発見された埋経遺跡について、遊佐町教育委員会において調査を実施した報告である。
2. 本報告書の執筆は、1～5・8を川崎利夫が執筆し、6を阿部亮蔵が執筆し、7を東京国立文化財研究所修復技術部青木繁夫、犬竹和の両氏が執筆した。
3. 写真は、川崎利夫と遊佐町教育委員会によるもので、実測図・図版作成は川崎があたった。
4. 木製経筒は、東京国立文化財研究所修復技術部第三研究室青木繁夫室長によって保存措置が行われ、外容器とともに遊佐町教育委員会に保管されている。
5. 本報告書の編集は、遊佐町教育委員会が行った。

本 文 目 次

1. 木製経筒発見の経緯	5
2. 周辺の地形と歴史的環境	7
3. 木製経筒の出土状況	12
4. 外容器と木製経筒について	14
5. 庄内地方における経塚のあらましと本経塚の位置づけ	17
6. 日陣上人の事蹟について	24
7. 遊佐町出土木製経筒の保存処理について	26
8. 結 言	31

挿 図 目 次

- 第 1 図 遺跡の調査状況 (写真)
- 第 2 図 周辺の遺跡分布図
- 第 3 図 玉龍寺廃寺跡(写真)
- 第 4 図 佐々木家屋敷内出土一字一石経 (写真)
- 第 5 図 遺跡付近の状況 (写真)
- 第 6 図 外容器及び木製経筒実測図
- 第 7 図 湯田川 1 号経塚の内部構造
- 第 8 図 水沢経塚の内部構造
- 第 9 図 庄内各地出土の経筒
- 第 10 図 羽黒山頂出土の銅製経筒
- 第 11 図 大机三学の岩屋の石製外筒(写真)
- 第 12 図 保存処理前(写真)
- 第 13 図 経筒内部の X 線写真(写真)
- 第 14 図 経筒表面の紙の接着(写真)
- 第 15 図 保存処理後(写真)
- 第 16 図 保存箱に経筒を納めたところ(写真)

図 版 目 次

- 図版 1. 埋経遺跡遠景
- 図版 2. 出土地附近遠景
- 図版 3. 出土地周辺石組状況
- 図版 4. 出土状況
- 図版 5. 外 容 器
- 図版 6. 木製経筒

1. 木製経筒発見の経緯

1991年(平成3年)8月29日午前9時頃、遊佐町大字吉出字金俣地区において採石作業中の斉藤工業の社長斉藤勇治氏より、陶製の円筒形容器を発見した旨の連絡があった。現場で作業に直接あたっていたのは斉藤富雄氏である。その処置はきわめて迅速適切なものであり、直ちに町長・助役・教育長・社会教育課長・同補佐らが現場に急行するとともに、前町文化財保護審議委員菅原傳作氏・致道博物館酒井忠一館長、山形県教育庁文化課へ連絡報告を行ったのであった。

同日、夕刻酒井館長も現場視察を行い、写真撮影や出土状況を確認した後に陶製容器を町役場内の町教育委員会に保管することにした。

その後、県文化課と協議の上、専門家による調査が必要であると考え、文化課より連絡を受けた川崎が9月6日午後から役場の一室において、外容器を子細に調査する機会があった。高さ 34.1 cm、口縁直径 15.5 cm の円筒形、平蓋付きの素



第 1 図 遺跡の調査状況

焼きの陶器で、蓋と身の隙間は膠状のもので封じてあった。色調は橙褐色又は黄褐色で黒斑が認められる。蓋を取りはずすと細かい木炭が充填され、中央部より木製の円筒形内筒がほとんど損傷なく完全なまま姿を表わした。内筒は淡紙様のもので丁寧に包まれていた。しかも内部には経巻軸木が納められていたらしく、振るとコトコト音がした。

しかし、当初はめ込みによって蓋と底が作られていると思い、内部をあけることは断念した。当日、記者会見を行い、全国的にもきわめて木製の経筒の出土は稀であること、さらに時期的にも中世以前に遡る貴重な発見であること、埋経遺跡研究にとっても大きな成果であることを強調した。

その後、宮城県多賀城市の東北歴史資料館において透視写真撮影を行ったところ、円板状の蓋と底をはめ込んだものではなく、底も蓋もくり抜いてつくられたものであること、内部の軸木は4本あり、紙は腐朽してほとんど経巻は残らないだろうことなどが判明した。

さらにその後東京国立文化財研究所第三修復技術研究室の青木繁夫室長のもとで保存修復処理を行った。その所見は後述する通りである。

その間、川崎は現地の再調査を実施し、発見当初、現場で作業の指揮にあたられた斉藤社長とも合ってつぶさにその状況の把握につとめた。

その後の調査により、南北朝期の延文年間に、経筒出土地の近くに旧玉龍寺を創建した日蓮宗の日陣上人が事蹟と関連する埋経遺跡である可能性が強いと推定されるに至った。

2. 周辺の地形と歴史的環境

木製経筒が発見されたのは、山形県の北西端、秋田県境にそびえる標高2,237mの鳥海山の西南山麓である。地籍上は飽海郡遊佐町大字吉出字金俣4-63で、原野となっている。金俣附近は火山の泥流を基盤にした台地でゆるやかな起伏をもつが比較的平らな畑地や原野がひろがる。

鳥海山南麓を西流し日本海に注ぐ月光川は天狗森の麓で左右に分かれるが、北側の月光川上流に金俣の集落がある。金俣を通り抜け月光川ダム・三の俣へむかう町道を380m進み、旧玉龍寺案内板の処より山に向かって570mの林道を行き、さらに右折して150m進み、急な斜面の山麓に本遺跡は位置する。月光川右岸、標高287.9mの三角点をもつ山の真南の山麓にあたる。標高210mである。

今は採石のため大方の石はとり払われたが、この部分一帯に大小の岩石が散乱し、あたかも瓦礫の山の如くである。かつての火山活動により地表に放出された火砕岩が山から落下して集積した場所であろう。中には数メートルの大岩塊がある。30トンは優に越えるであろう。大部分は角礫質の安山岩である。この岩塊の



×金俣埋経遺跡 第2図 周辺の遺跡分布図 (1982、佐藤禎宏による図に附加)

- 1: 宮山坂F遺跡 2: 宮山坂B墳墓 3: 神矢田遺跡 4: 臂曲A遺跡
5: 金俣F遺跡 6: 金俣A遺跡 7: 金俣B遺跡 8: 月の原B遺跡 9: 杉沢遺跡

すき間から経筒が出土したのである。

鳥海山西南麓の台地には後期旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が数多く分布する。^{註(1)} 金俣において旧石器の存在することが明らかになったのは村上孝之助氏の採集品の中からである。金俣遺跡 A 地点からは石刃・搔器などが出土しているし、それより 100 m ほど北の地点からナイフ石器が見つかった。^{註(2)}

金俣遺跡の北々西 1 km の^{ひじまのり}臂曲遺跡からはナイフ型石器や彫刻刀が出土している。何れも^{すざくばい}杉久保型ナイフ型石器文化に関連する遺跡で 15,000～17,000 年以前に遡ると推定される。これよりも南に位置する月光川右岸の独立丘である宮坂丘からは旧石器時代の最末期の舟底形細石刃核・細石刃・ナイフ形石器・彫刻刀などの良好な資料が発見された。^{註(3)}

金俣遺跡 B 地点の発掘調査は 1966 年（昭和 41 年）に佐藤禎宏・加藤稔氏らによって行われ、柱穴を有する円形プランの住居跡と縄文早期末の縄文条痕文土器や表裏縄文土器などが出土している。^{註(4)}

月光川をはさんで対岸側にある杉沢地区でも縄文中期の遺跡である月の原 A、同 B 遺跡があり、月の原 B 遺跡からはナイフ型石器・大形石刃などの旧石器も出土している。^{註(5)} また大洞 C₂ 式期の完形土隅を出土した杉沢遺跡も近くにある。^{註(6)}

さらに鳥海山の裾野を北西にまわり、月光川と高瀬川が合流する吹浦川の北の台地一帯は古くから知られている吹浦遺跡で縄文前期末の一大集落跡があり、^{註(7)} 吹浦バイパス建設に伴う最近の緊急発掘調査で平安時代の集落跡も一部重複して発掘された。^{註(8)}

鳥海山の西側の裾野が日本海にのぞむあたり、山形・秋田県境の三崎山の小さな凹地から縄文後期中葉の土器とともに、中国の殷墟などから発見された青銅刀が出土し、中国や北方からの渡来を物語るものとしてつとに知られている。^{註(9)}

また遊佐町の中央部を東から北へと流れる月光川流域は平野部であり、西側は砂丘をへだてて日本海にのぞむ。「日本三大実録」に元慶 8 年（884 年）から仁和 2 年（886 年）まで 3 回にわたって、飽海郡西浜あるいは神宮寺周辺から、大雨の後に石鏃が多数見つかり、異変の前兆として朝廷に報告され神々に祈願したという記事が見える。この場所がおそらく遊佐町の平地部から砂丘にかけての場所と考えられている。

現に 1970 年から 71 年にかけて町教委によって発掘された神矢田遺跡（北目）

からは、縄文後期から晩期、さらに弥生土器などが石器を伴って多数発見されている。^{註(10)} 西浜には、移動する砂丘下に今は埋まった神矢道遺跡もある。

遊佐町の月光川や高瀬川の流域の微高地は平安時代の集落跡の密集地帯である。1988 年頃より水田地帯の大型圃場整備事業が実施されるに及び、多くの遺跡の発掘調査が行われ、それは現在も続行している。東田・浮橋・下長橋・小深田・地正面・三田・大坪・宅田遺跡などで、平安時代から鎌倉時代の遺跡や遺物が検出されている。最近は袋冷・木原・中田浦・筋田・石田・金俣 I・K 地点などが調査され、土師器・須恵器・赤焼土器などの遺物とともに掘立柱建物跡・土壇・溝跡などが発見されており、大方は 9 世紀より 10 世紀の集落跡である。^{註(11)}

なかでも注目されるのは 1987 年（昭和 62 年）より 1991 年（平成 3 年）まで県教委につづいて町教委が主体となって調査した大字小原田の大楯遺跡で、12 世紀より 15 世紀までの遺物が出土しており、40 m 以上の不整形をなす木柵に囲まれた内部より掘立柱や磁石による数棟の建物跡が掘り出されその周辺にもなお多くの建物群が検出されている。この地域の中世豪族であった遊佐氏の居館跡とする説も有力である。^{註(12)}

なお月光川が山地帯より平地部に流下するあたりの天狗森には古代窯業遺跡が分布し、北岸の宮山坂には古代の火葬墓群が発掘調査されている。^{註(13)}

このように遊佐町周辺は、旧石器時代から縄文・弥生をへて中世までの遺跡が密集する地域である。旧石器時代や縄文時代には、神の山である秀麗な鳥海山を背景に山麓にひろがるブナ帯森林や河川を定期的に遡るサケ・マスは大いなる自然の恵みであった。

古代において蝦夷の地と境を接する鳥海山は大物忌神として式内大社に列せられる国家的に重要な神として尊崇を集めてきた。延長 5 年（927 年）撰上された「延喜式」には「遊佐 駅馬 十疋」の記載があり、これが「遊佐」の地名の初見である。承平 5 年（935 年）に源順によって編まれた「和名類聚抄」には「飽海郡遊佐郷」の名もみえる。従って古代より交通上の要地であり、国家にとっても重要な場所であった。古代の各種遺跡が密集するのもうなづけるのである。

さて、平安時代末期の左大臣藤原頼長の日記である「台記」には、仁平 3 年（1189 年）源頼朝の平泉討伐に端を発した奥羽合戦に際しては、「東鑑」に田川太郎行文・秋田三郎致文・由利八郎維平らの名がみえるが、遊佐太郎もこれら



第3図 玉龍寺廃寺跡



第4図 佐々木家屋敷内出土一字一石経

と同様平泉配下の地方豪族であったのではないか。

古代・中世において遊佐は、人びとの往来や来住も多く、人びとに知られた開けた処であったのに相違ない。延文4年(1359年)に天台宗の学僧として高名な

東光寺玄妙が法華宗の日陣とともにこの地に来て、鳥海山麓「猿鞍の洞穴」において100日間の修行をしたという。翌延文5年には日陣が近江の佐々木石見守綱利を伴って法華宗の布教にあたるため再来したといわれる。そして佐々木氏によって吉出村が開かれ、三ノ俣に旧玉龍寺を創建し、後に金俣の地に移建されたという。いま玉龍寺跡は月光川上流を眼下に見下す台地上に廃寺となって建物の礎石などを残している。日陣上人は佐々木家の屋敷内に一字一石経塚を営み、その上に氏神である「八幡神社」を創建したといわれる。(「書付」佐々木家文書) 本埋経遺跡も日陣の事蹟に関連あるもののようである。

註(1) 酒田中央高校社会研究部「遊佐町の遺跡」庄内考古学5号 1967年。

註(2) 柏倉亮吉・加藤稔・佐藤禎宏・佐藤鎮雄「鳥海山麓の考古学的調査－石器時代遺跡を中心に」(山形県総合学術調査会「鳥海山・飛鳥」所収)1972年

註(3) 佐藤禎宏「宮山坂下遺跡出土の細石器」山形考古3/3 1982年。

註(4) 註(2)に同じ。

註(5) 佐藤禎宏「月の原B地点の先土器文化」庄内考古学3号 1966年。

註(6) 酒井忠純・江坂輝弥「山形県飽海郡蔵岡村杉沢発見の大洞C₂式の土偶の出土状態について」考古学雑誌 39-314 1954年。

註(7) 柏倉亮吉・江坂輝弥・酒井忠純・酒井忠一・加藤稔「山形県飽海郡吹浦遺跡調査報告」1955年。

註(8) 渋谷孝雄・佐藤正俊・長橋至「吹浦遺跡第1次緊急発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書82集。以後第3・4次(1988年)までの発掘調査報告書が刊行されている。

註(9) 柏倉亮吉「三崎山の出土青銅刀」東北考古学2号 1960年。

註(10) 佐藤禎宏・佐藤鎮雄「神矢田遺跡」(遊佐町教育委員会)1971年。

註(11) 山形県教育委員会より「山形県埋蔵文化財報告書」として個々の遺跡の発掘調査報告書が刊行されている。

註(12) 佐藤禎宏・酒井英一「大楯遺跡第3・4次発掘調査報告書」(遊佐町教育委員会)1991年。

註(13) 酒井忠一・川崎利夫「山形県飽海郡遊佐町宮山坂火葬墳墓群について」考古学雑誌49/3 1963年。

3. 木製経筒の出土状況

埋経遺物が出土した場所は、飽海郡遊佐町大字吉出字金俣で、鳥海山西南麓の標高 287.9 m の山の南斜面下、標高 210 m の傾斜転換点であり、大小の火砕岩塊が散乱する場所で、地目は山林と原野である。それら岩塊のすき間から発見されたのであった。旧玉龍寺廃寺跡より直線距離で 500 m 北東の地である。いま町道金俣・三ノ俣線より北東へ狭い林道に入り 570 m 進んでさらに右折して 150 m、左手の斜面下である。現在は採石が終ったので、発見当初の瓦礫の地ではない。

当初は大小の岩塊や転石が散乱していた。ほとんどが角礫質の安山岩である。幅 4 m、高さ 2 m ほどの大岩塊のすぐ傍らに不整形の 3 m × 2 m、高さ地面より 70 cm ほどの数個の石が集った場所があった。他にもこの程度の岩塊が集まっている場所があったので、特別の石組み遺構などとは考えられなかったという。1 m ほどのやや扁平な石を取り除いたところ、周囲を岩塊で囲まれた小洞穴式のすき間より経筒外容器の蓋が姿をあらわした。石組みの右手の方はやや石が小さかった所以、これを取り除くと奥行き余りない小洞穴状になる。はじめに除去した上の平らな石は屋蓋の役割を果していたのであろう。外容器は損傷が全くなく、地面に立てられたまま発見された。(第 5 図及び図版 3・4)



第 5 図 遺跡附近の状況

以上より意識的に埋納の施設を作り、経筒を納めたものではなく、岩塊の空隙を利用して埋置し、屋根状の石はあるいは埋納後に架されたものかも知れない。自然の小洞穴を活用したものであろう。

埋置穴の跡は土が乾いており、水はけがよく雨水の入ることがほとんどなかったもので、完全なままで埋経遺物が保存されたのは幸いであった。その外容器が堅緻で、内部に粉炭が充填されてあったことも木製内筒を保護することになったのである。

経塚のほとんどは山頂などの景勝の地、寺社境内などの霊地に営まれるのが普通である。もちろん平田町田沢の経ヶ倉山のように山頂近い洞穴や修験行者が修行した鶴岡市大机三学の岩屋などの例もあるが、岩塊が地獄の山のように散乱する一見荒れはてた地に経塚が営まれる例はほとんどきかない。ここからは古くからの信仰の山である鳥海山も山々にさえぎられて見えない。直接的な鳥海山信仰と関連をもつ遺跡とは考えがたい。

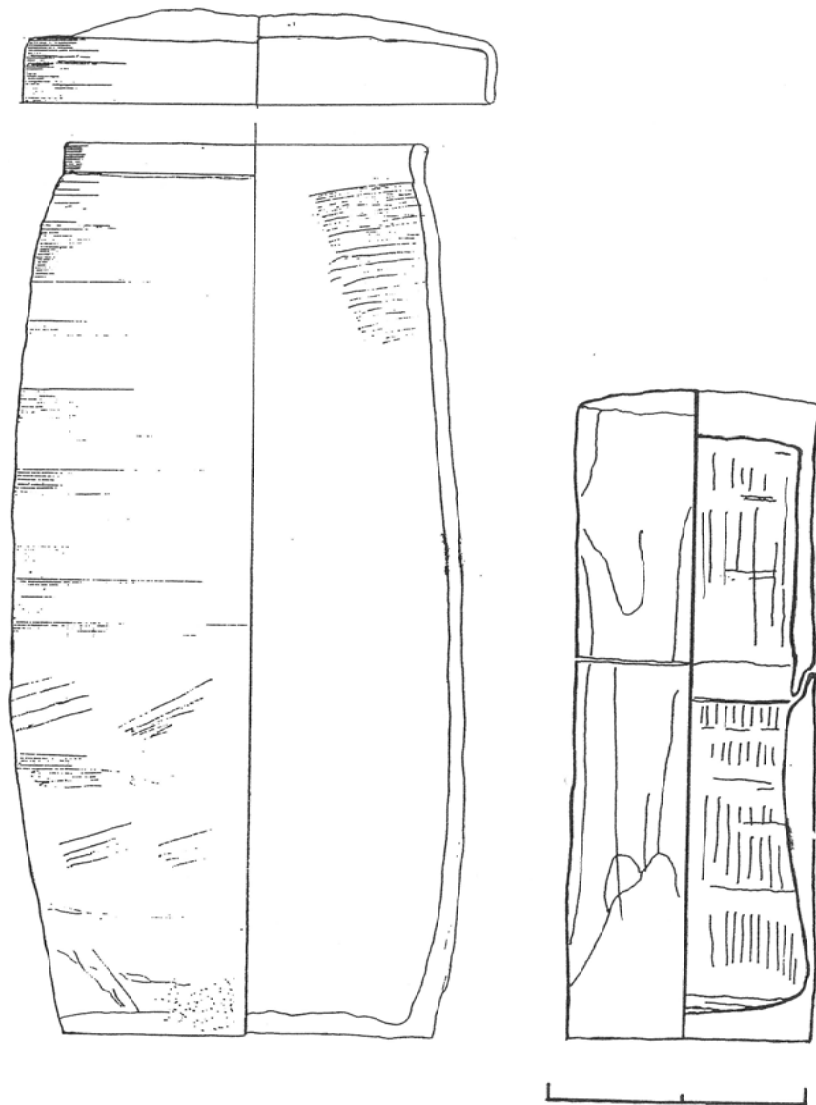
なぜここに経塚が営まれたかについては、後にさらに考察をすすめたいと思う。

4. 外容器と木製経筒について

外容器は蓋が膠状のもので筒身に密着しており、蓋を取り除くと粉炭と思われる細かい炭化物が木製の経筒を覆っていた。

(1) 外容器（第6図及び図版5）

全体的に円筒形をなす酸化炎焼成、素焼きの土器である。全高 34.1 cm、蓋径 15.2 ~ 15.7 cm、筒身高 33.1 cm、筒身径 13.7 cm、底径 14.0 cm、器厚 0.6 cm ~ 0.9 cm。橙褐色を呈し、器表に黒斑が認められるが、焼きは堅い。



第6図 外容器及び木製経筒実測図

蓋は被せ蓋で、身に被さる部分は高く、僅かに盛り蓋気味にまん中の方が高くなる。筒身は蓋受けの部分 1.1 cm で立ち上がる。ほぼ円筒形であるが、中央部で膨みを見せ、直径 17 cm を測る。蓋が身に対して 2 cm ほど大き目で、きっちり填まる感じではない。筒身は口縁と底部が同じ大きさで、胴部でゆるやかに膨らむのである。

蓋にも筒身上部にも、ろくろなどの痕が明瞭に観察される。筒身下半部にも、ろくろ目があるが、ヘラ整形やカキ目の跡が残る。内面には粗いヨコナデが認められる。底部は平底で僅かに砂が付着する。蓋の上面にはヘラ削りが認められる。

整形にあたっては、ろくろを用いて底部から引き出し、3段ぐらいに重ねたものである。

県内で陶製の経筒は比較的出土例が多いが、外容器として用いられたものに山辺町根際普光寺や鶴岡市西目経塚の例があるが、すべて還元炎焼成による瓷器系や須恵器の流れをくむ珠洲焼系のものが多い。このような酸化炎焼成のものは初めてである。

おそらく当初から経筒を納める外容器として地方窯で製作されたものであろう。

(2) 木製経筒（第6図及び図版6）

高さ 23.8 cm、口径 8.9 cm、底径 9.3 cm。上・下余り変らない円筒形である。桐を材質としているので非常に軽く、100グラムである。全面を渋紙様の和紙でおおっており、それが上面でまとめられている。紙の色が木質に移ったのか全面黒褐色を呈する。まわりに粉炭があったので、それが紙に移ったのかも知れない。

当初は上下とも円板上の板をはめ込みによって閉塞したものと考えたが、透視写真などによって、上から 10 cm のところに継ぎ目があり、茶筒などとは反対に逆印籠型の蓋受けによって身にはまるようになっていたことがわかった。上面は心持ち盛り上がりを見せるが、底面は平坦である。

内面はのみのような工具で内部をえぐりとり空洞にしており、内面にその跡が残るが底面なども平滑にしていねいな手法で仕上げられており、底面内部はやや深くえぐりとられている。

一本の桐の木を素材として、内部をえぐりとり合せたものであり、木目は明瞭ではないが、部分的に認められる。上面・底面とも側面に比較すれば厚く、上面の厚さは 1.7 cm である。

1981年に京都府福知山市大道寺経塚より筒身が竹製で、蓋が木製、つまみのついた経筒が出土したことがあるが、これは高さ22cmで、同じ外容器から竹製経筒2本と銅製経筒が掘り出されたが、12世紀の経塚であるといわれている。(1)他に木製品は、和歌山県高野山奥の院経塚(永久元年-1113年、銘願文等在中)の曲物に漆をかけた例、京都市花背1号経塚及び福岡県四王寺山経塚群から発見されたものが知られている。しかしこれらは何れも銅製経筒の内筒であって、経筒としての直接容器ではない。(2)本県内でも鶴岡市水沢経塚がこの例である。

また山形市山寺立石寺境内の伝慈覚大師入定窟内にあった金棺の蓋板に打ち付けられてあった塔形の木製容器(幅2cm、長さ18cm)より石墨草筆の阿弥陀経が入っていた。この木製塔形容器には、康元2年(1257年)の記年銘がある。これも広い意味では納経容器であるが、いわゆる掛経筒といわれるもので、納経などのための経容器である。(3)

しかしながら本例のように、木製の経筒としての出土例はほとんどなく、誠に稀有な発見といわなければならない。

註(1) 関 秀夫「大道寺経塚出土品」(「日本の考古学」東京国立博物館)1988年。

註(2) 三宅敏之「経塚の遺物」(「新版仏教考古学講座第六巻 経典・経塚」所収)1977年。

註(3) 川崎浩良「山寺霊窟調査報告」(山形県史跡名勝天然記念物調査報告書1)1950年。

(3) 経巻軸木

紙本経は破損腐朽甚だしく、炭化物化していたので開くことは全く困難であった。経巻の軸木は折損したものもあったが、長さ17~18cm、径0.3cmぐらいの竹ひご状のものが4本認められた。従って4巻の経巻が納められていたことになる。

5. 庄内地方における経塚のあらましと本経塚の位置づけ

以下に庄内地方における経塚を概観し、本経塚の位置づけをさぐってみよう。

経典を書写して埋納した遺跡を経塚といっているが、これは平安時代末期の末法思想が背景にあり、56億7千万年後の弥勒菩薩出現の時まで、経典を保存しようとするものであった。経塚を築くことは当時の上流階級の人びとにとって、堂塔を建立することと同じように作善の行為であり、祖先をとむらい、故人の冥福を祈り、極楽浄土への往生も約束される逆修善根の業でもあった。藤原道長も寛弘4年(1007年)に吉野金峯山に埋経を行っているのである。実際に埋経の遺物が出土した例としても、また「御堂関白記」に記載されていることとしても最も古い埋経を伝える事実である。

北九州あたりには11世紀の経塚も多いが、東北地方では、南陽市宮内別所山経塚の保延6年(1140年)銘の銅製経筒が示すように12世紀、なかんずく、その後半にもっとも盛んに経塚が営まれる。そして13・14世紀には埋経は衰退するが、中世末期の16世紀に経典を書写して納経する風習が盛んに行われるようになる。そして六十六部聖などによって全国の霊場へ納経が行われる。その後近世にもっとも盛んに行われる一字一石埋納は現世利益的な願いを反映したものが多く、当初の経典保存の趣旨は全く失われる。

12世紀代に行われる「埋経」、16世紀代の「納経」、近世に盛行する「一字一石経」は、それぞれにその趣旨が変化するとともに遺構のあり方も違うものとなるのである。山形県には埋経の経塚(群)は35箇処、納経の遺跡が10箇処あり、近世の一字一石納経遺跡は数百箇処に及ぶのではないかと推測される。註(1)

さて庄内地方における埋・納経の遺跡は次の12箇処である。

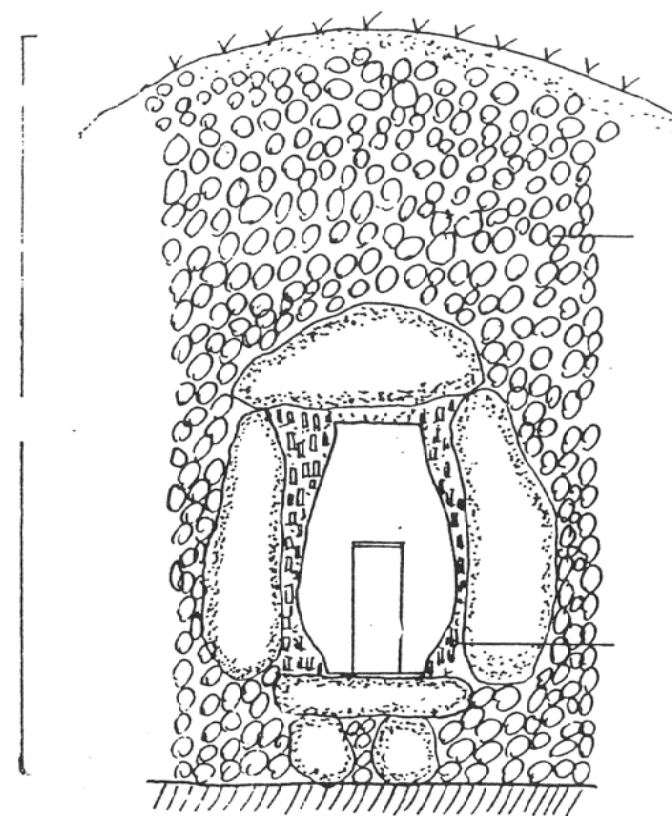
No	名 称	所 在	出 土 遺 物
1	大 山 経 塚	鶴岡市大山城山	銅鑄製経筒 須恵系外容器
2	水 沢 経 塚	鶴 岡 市 水 沢	銅鑄製経筒 須恵系外容器 刀子6

3	湯田川経塚群	鶴岡市湯田川	銅鑄製経筒（佐伯時兼銘） 石製外容器、須恵系外容器 刀子、古銭（開元通宝）
4	狩川経塚	立川町狩川	銅板製経筒、須恵系外容器
5	大机岩窟遺跡	鶴岡市大机	陶製経筒、石製外容器
6	羽黒山頂経塚	羽黒町手向	銅鑄製経筒2（建長4、文保3 年銘）懸仏残欠、 須恵系外容器
7	西目経塚	鶴岡市西目	陶製外容器
8	鷹尾山経塚群	酒田市北沢	須恵系外容器 陶製経筒
9	経が倉山遺跡	平田町田沢	陶製経筒 須恵系外容器（岩窟中に現存）
10	新山経塚	平田町榎橋	須恵系外容器
11	楯の腰経塚	八幡町麓	須恵系外容器2
12	山寺経塚	松山町山寺	須恵系外容器

以上が現在知ることができる一字一石納経遺跡を除いた埋・納経遺跡である。これにこの度新たに本金俣埋経遺跡も加わることになる。

大方の経塚は、見晴しのきく山頂の景勝の地や古社寺の境内に築かれるものが多く、岩窟中に納められるものも若干例ある。外形は径3～6m、高さ1～1.5mの円形の塚が多く、礫石によって構築される。内部には小石室が設けられ、その中に経筒を保護する外容器が据えられ、内部より内筒である経筒が発見される。

その典型的な例として湯田川経塚について述べよう。^{註(2)} 式内社である由豆佐売神社社殿の裏に5基の塚がある。1932年（昭和7年）にそのうちの2基が発掘された。積石塚の1号塚には内部にやや大き目の石でつくられた小石室があり、内部は木炭で充填されて、須恵系の外容器が経筒をおおうように倒立して発見さ



第7図 湯田川1号経塚の内部構造

れ、これを取り除くと銅板製鋳留による経筒があった。（第7図）

倒置されていた外容器のかめは、条線状叩目が施された珠洲焼の大甕で高さ39cmあった。経筒は高さ24.5cm、径11.3cmで、筒身は金銅板4箇処に鋳留めがあり、蓋は被せ蓋であった。筒身に双字体で「佐伯時兼」と針書銘があった。これとともに刀子1振、「開元通宝」などの銭貨も5枚程出土している。

2号塚の出土状況は不明であるが、石櫃と須恵系の甕・浅鉢などが出土している。12世紀の後半に築造された経塚である。

湯田川の西2kmの大字水沢字丑が沢でも1946年（昭和21年）に経塚が発掘された。石山不二軒の裏山にあたり地藏堂山という。^{註(3)} 外形は径2m余り、高さ40cmほどの積石塚で、地表下1.4mのところに扁平な石で囲まれた小石室があり、天井石を取り除くと木炭が充填しており、その中から経筒が発見された。経筒は高さ26cm、径13cmほどの銅板製鋳留で、被蓋式平蓋であり外容器はなかった。

そのかわり経筒の内部より厚い和紙を貼りつけた曲物による木製内筒が出土した。なお周辺から5振りの刀子が出土している。(第8図)

羽黒町の羽黒山頂からも、1958年(昭和33年)三山合祭殿南側の杉の古木下より大かめが出土し、その中から経塚遺物が発見された。^{註(4)}大かめは高さ77cm、口径66cmの珠洲焼系の甕で、表面には全面に条線状叩目が認められた。その内部から経筒2個、経石1個、銅造小仏像と鏡板片など懸仏一具、鏡片、古銭43枚などが雑然とした状態で納めてあった。

経筒の一つは鑄銅製で、高さ14.6cm、径7.6cm、蓋を欠くが、筒身には次の銘文が陰刻されていた。(第10図)

「建長二二年壬子

八月八日

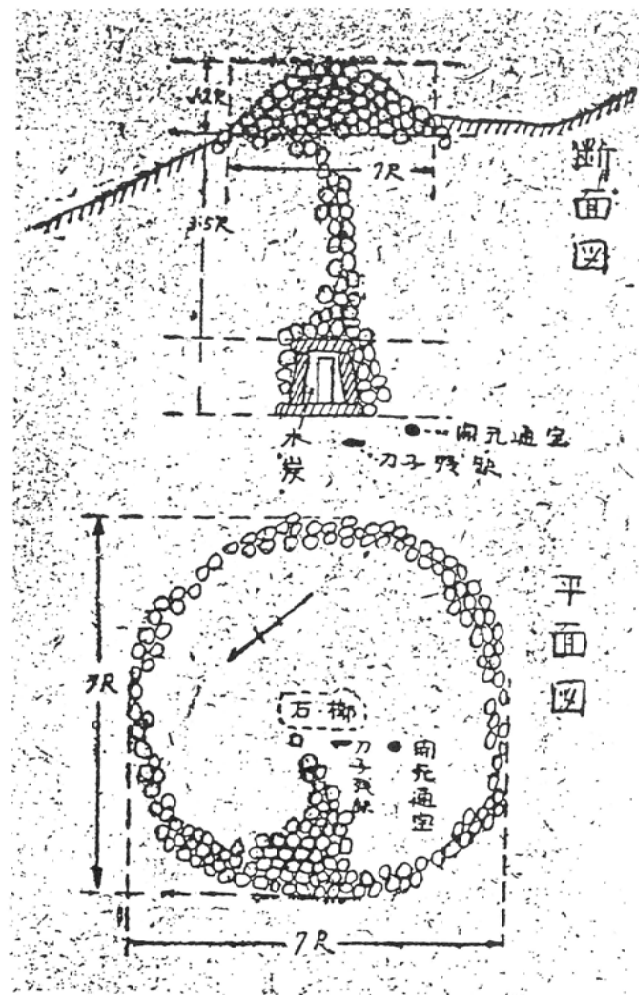
本聖人 阿念房」

鎌倉時代中期、建長4年(1252年)の経筒であることがわかる。

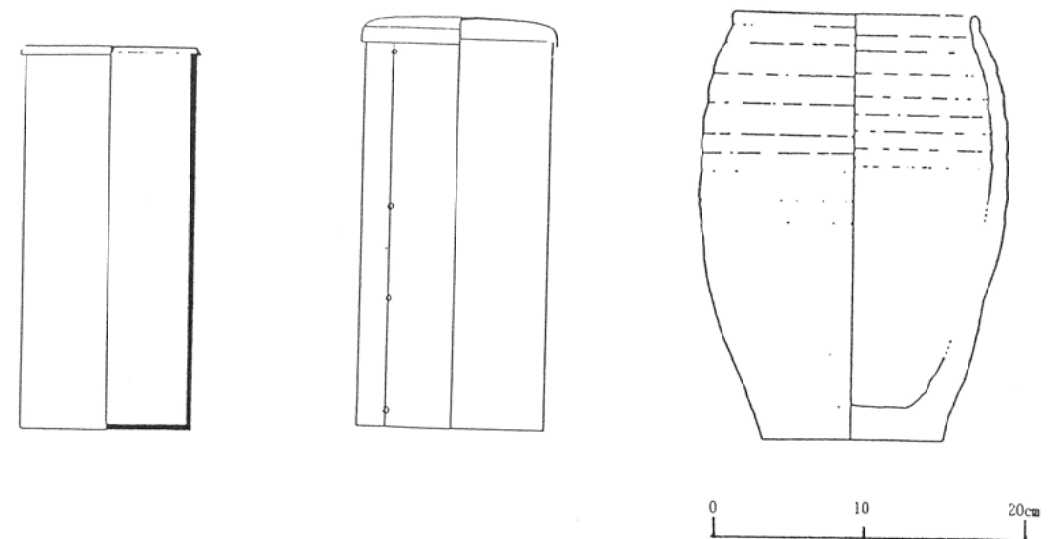
もう一つは銅板製で、高さ15.7cm、径4.5cmの円筒形小形で、蓋は宝珠鈕付の盛蓋で、筒身に次のような針書銘があった。

「妙法蓮華經一乎六十六部内

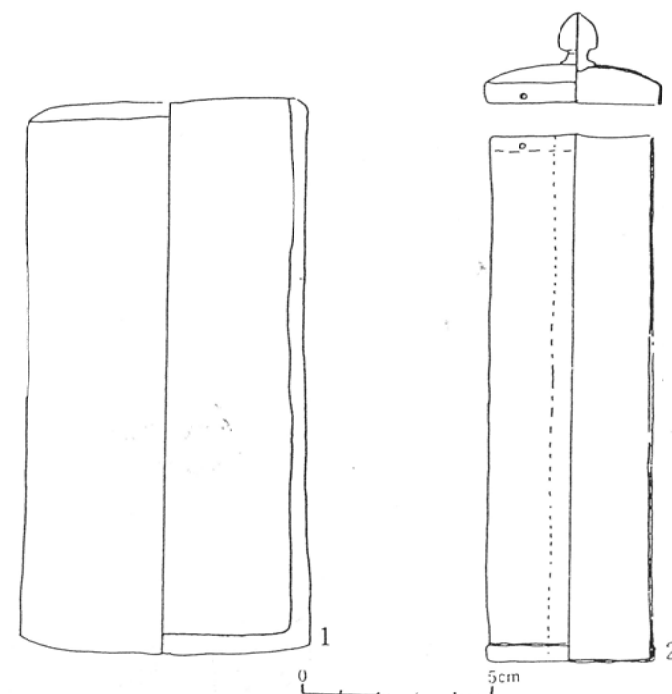
文保三年二月八日



第8図 水沢経塚の内部構造
(羽陽文化4号より)



第9図 庄内各地出土の経筒
1. 大山(鑄銅製) 2. 湯田川(銅板製)
3. 西目(陶製)



第10図 羽黒山頂出土の銅製経筒

檀那佐渡国雑太住人間七郎

入道沙弥晓忍

聖人同所住越中房蓮祐」

これは鎌倉末期の1319年に納められた経筒であるが、16世紀に盛行する六十六部廻国納経の最古の例として注目される。

懸仏類は鎌倉期、また銭貨は北宋銭、明銭から「寛永通宝」までである。これらから考えて、江戸初期に一括して再埋納されたものと思われる。

羽黒山に近い立川町大字狩川字笠山からも1970年（昭和45年）に須恵系の壺を外容器とする銅板製経筒が発見されている。^{註(5)}

最上川以北の飽海地方では、修験道が盛んであった酒田市北沢の鷹尾山中にも経塚群があり、その一つより須恵系外容器と陶製経筒が出土している。^{註(6)} また平田町田沢奥の経が倉山は標高474mで、その山頂近い場所に自然洞穴があり、その中に高さ53cmの須恵器系外容器に納められた高さ24.2cmの陶製納筒が現存する。

また岩窟中に経筒が納められている例としては、鶴岡市奥の大机「三学の窟」にも石櫃に納められた陶製経筒が現存するが、これは江戸時代のもと思われる。（第11図）

飽海地方には他に、楯の腰（八幡町）新山（平田町）、山寺（松山町）などの経塚があるが、須恵系の経かめといわれているものの出土はあるが、その出土状況は明瞭さを欠き、経塚としての徴證には乏しい。

厳密な意味では、経が倉山や大机例は「経塚」の名称はふさわしくない。塚を築いて、その土中に埋経したものではないから「埋経遺跡」と呼ぶのが当を得ている。従って本金俣経塚も慣



第11図 大机三学の岩屋の石製外筒

例上、経塚の名を付したが「金俣埋経遺跡」とするのが正しいであろう。

また12世紀代に多い「埋経」か、16世紀に盛行する「納経」かといえ、金俣例は外容器を伴い木炭を充填させ密封を施すなど経典保存の意図が明らかで、「納経」ではなく「埋経」の遺跡である。「納経」の場合は、埋納方法も簡素化して経筒も小型化し、高さ10cm内外のものが多い。銘文も

「十羅刹女

奉納 大乘妙典六十六部

三十番神」

のように類型化してくる。

従って本埋経遺跡の年代は、16世紀ではありえず、むしろ平安時代末期の埋経遺跡の伝統を色濃く反映したものである。木製の経筒は初めての発見であり、外容器も赤焼系酸化炎焼成の土器で、平安時代から中世にかけて広く用いられているものであり、時代を限定するきめ手に欠くきらいがある。平安時代末期としても何ら不自然さはない程である。しかしながら近くに日陣上人開創の「玉龍寺」があり、日陣がかつては天台宗に関係があったとすれば、当然埋経の功德については熟知していた筈である。しかも伝承や文献でも、日陣の埋経の事績を伝えている。それらの歴史的背景を考慮に入れ、さらに立地条件を勘案すれば、14世紀中葉の埋経遺跡とするのが至当であろう。

註(1) 川崎利夫「山形県の埋・納経遺跡について」山形考古4ノ4 1991年。

註(2) 川崎利夫「鶴岡市湯田川の経塚について」庄内考古学8号 1968年。

註(3) 村上文雄「地藏堂山の経塚」羽陽文化4号 1949年。

註(4) 川崎利夫・佐藤禎宏「羽黒山頂の諸遺物について」（山形県総合学術調査会「出羽三山・葉山」）1975年。

註(5) 川崎利夫「立川町狩川経塚について」庄内考古学14号 1977年。

註(6) 小野 忍「酒田市大字北沢大平周辺の古代中世遺跡について」庄内考古学14号 1977年。

6. 日陣上人の事績について

父出雲守護判官佐々木高貞は讒言にあい、尊氏の討によって城中で没した。母（今出川兼季卿の娘）はこのとき懐妊していたので従者に守られて、まず、京都西陣に難をさけ、その後、越後国北蒲原郡中条の小荒川に逃れ、延文4年(1339)加治荘にて日陣を無事出産した。^{註(1)}

9歳のとき、越後国三条の法華宗総本山根本道場本成寺の日龍師の弟子となり仏門に入り門一磨と称した。天性の英知は群を抜き、後年、本成寺と京都本圀寺の貫主日静上人の門に入り、名を円光房日陣と改め、いっそう法華經の学を深め、門一阿闍梨の称号が与えられた。^{註(2)}

日陣上人は、延文4年(1359)21歳のとき、天台の学を極めようとして、奥州会津山に登り、当時天台の学僧として高名な東光寺の玄妙師（後年、天台宗から改宗して顕本法華宗をたて名を日什と改める）について学び、師が羽黒山を兼務していたので、師に同道して庄内に来たり、師ともに鳥海山麓を訪れ、猿鞍の洞穴に入って100日の修業をした。この事績が上人のこの地における始まりである。この穴は「法華の穴」または「玄妙の穴」とも言われている。^{註(3)}

日陣上人は、ここから約1キロ下の金俣の地に一堂の建立を思い立ち、ひとまずこの地を後にし、翌、延文5年(1360)、近江国八幡山の城主佐々木石見守綱利が同族で法華經の信仰者であることから、日陣上人を篤く慕っていたので綱利を伴い再来した。兩人は一緒にこの洞穴に起居して修業に励んだ。^{註(4)}

やがて、綱利は日陣上人の法華經布教のためと佐々木家同族の菩提寺として金俣（旧玉龍寺跡地）に本水山妙頂寺を建立した。また上人は、法華經の靈地を金俣近隣の鳥海山麓一帯に定め、七堂（法華の穴、寺屋敷、一の滝、二の滝、穩れ滝、經塚、ほかもう一つ）を開場したとも伝えられている。^{註(5)}

延文5年以後の10年間、上人の事績は明らかではない、一説には、諸国を行脚して法華經の布教を続けていたとも言われている。31歳のとき、京都本圀寺貫主日静上人から、法華宗の根本道場である本成寺を譲り受け貫主となった。

応安3年(1370)、上人32歳のとき、綱利は、鳥海山麓の地を永住の地と定め、近江国の家族、隣人を呼び寄せ、田畑を拓き家建て、吉出村を創始した。^{註(6)}

このとき上人は、佐々木家と村民の繁栄を願い法華經の一部大乘妙典七万余字

を清流から収集した小石に書いて佐々木家の屋敷内に埋納し、永代不朽の靈場とした。この經塚に堂を建立し、蒲生郡にある佐々木家の守護神正八幡宮を勧進して祀った。^{註(7)}

日陣上人は、諸国を行脚して法華經の布教順化に励み、問答によって改宗させた寺が10数か寺あるという、本成寺の三祖中興開山として、日連宗祖の元意を維持したので、他と特に区別して当門を陣門流と呼び、上人を門祖として敬愛している。このようにして多くの事績を残した上人は、応永26年(1421)81歳、本成寺において遷化した。^{註(8)}

註(1) 註(2) 註(3) 註(4) 註(5) 註(6) 註(7) 註(8)

佐々木 宏、高橋松三編集「玉龍寺の由来」1974年。

註(5) 齊藤美澄 「飽海郡誌」 1915年。

7. 山形県遊佐町出土木製経筒の保存処理について

東京国立文化財研究所
修復技術部

青 木 繁 夫
犬 竹 和

1. はじめに

この木製経筒は、遊佐町吉出の岩石採石場から発見されたもので、円筒形の陶製外筒の中に入っていた。このような木製経筒の出土例が少なく、きかめて貴重な遺物なため当研究所に調査に持ち込まれ、平成4年度の受託研究として調査および保存処理が実施された。

2. 保存処理

当研究所に持ち込まれた時、経筒は陶製外筒からだされた状態であった。経筒を振ると内部で音がするため、経巻の存在が推定された。

2-1) 処理前の状態

茶筒状の円筒形経筒で、全体に暗褐色の接着剤で紙が貼られている。紙を貼った接着剤には、色および表面が乾燥し、その内部が乾燥していない時に表われる漆特有の収縮が見られる。紙はかなり固くなっていて、簡単に折れて剥落してしまう。また紙が木の表面から剥がれ、U字状に膨れ上がり、押すと簡単に壊れてしまう。紙の剥がれた所の観察から、桐を使用し、その一本の内部をくり抜いて製作してある。本来ならば、経筒はどこかの位置で上下に分れる筈であるが、外観観察ではその様な場所は見られない。(第12図)

2-2) 赤外線テレビ調査およびX線撮影

漆紙文書のように、貼られた紙に墨書等が存在する可能性が考えられたので、まず最初に赤外線テレビを使用して墨書の確認を行ったが、その存在は確認されなかった。

次に、内部からの音の原因を確認することと、経筒の構造を確認するためにX線写真撮影を行った。

X線写真撮影条件

X線撮影装置：ソフテックス

X線フィルム：富士医療用X線フィルム

増感紙：0.1 mm鉛増感紙使用

管電圧：30 kV

管電流：3 mA

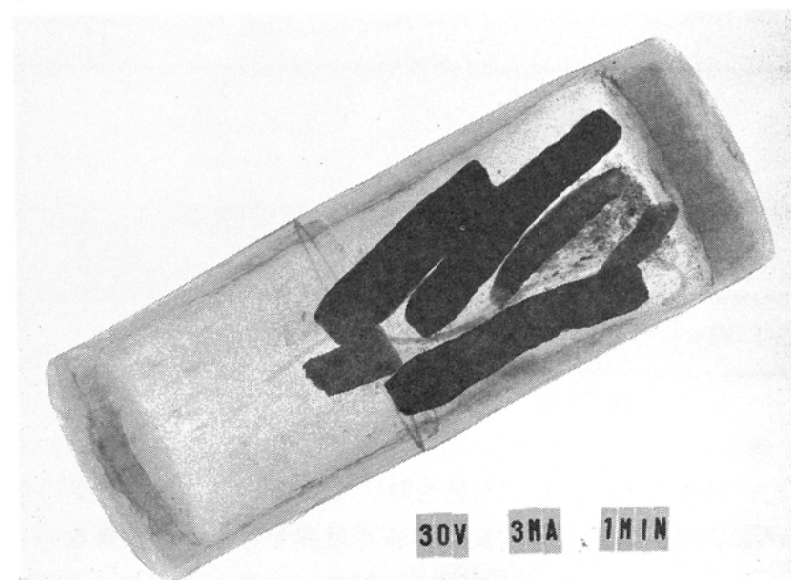
照射時間：1 min

管球とX線フィルムの距離：1 m

現像液：レンドール 20℃ 5分間

定着液：レンフィックス 5分間

撮影の結果内部に10 cm程度の経巻3巻、割れた経巻3点と竹ひご状の経軸数本が確認された。経筒は内部をくり抜いたもので中央部分が逆印籠蓋式になっており、その部分で上下に分れるようになっているが、印籠蓋の隙間は樹脂がしっかり充填されている。(第13図)



第13図 経筒内部のX線写真

2-3) 保存処理

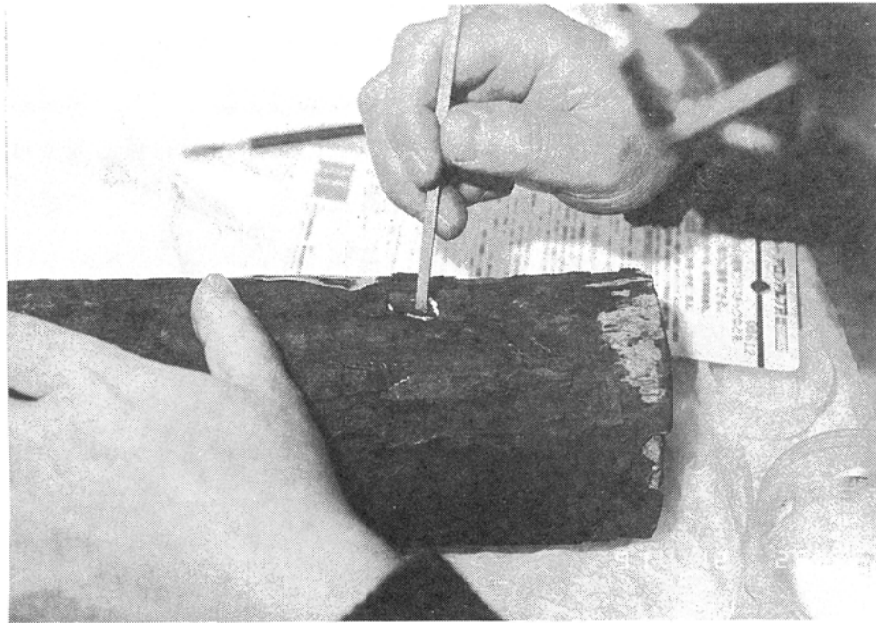
経筒

X線写真で確認された経巻を取り出すために、逆印籠蓋部分で切断することにした。切断は工作用グラインダーの先端に円板式のダイヤモンドカッターを取り付け、X線写真を参考に逆印籠蓋部分を切断した。

切り離した時に身の内側に接着したままの立ち上がり部分を竹篋で綺麗にひきはがし、それをアクリルエマルジョン(ミルボンド)を使用して蓋に接着復元した。

経筒の内側は、イソシアネート樹脂（PS-NY-6）を注入含浸して強化した。

経筒の外側の剥離しかかっている紙をアクリルエマルション（ミルボンド）で接着し、（第14図）U字状に浮き上がった部分には、その中にアクリルエマルション（ミルボンド）に木粉をまぜた樹脂で充填接着した。（第15図）



第14図 経筒表面の紙の接着

経 巻

よく固着し、経巻の木口を見ても紙を巻いた時のスジは見られないため、紙の保存修復の専門家と検討した結果、経巻を展開することは出来ないとの結論になった。脆弱になった経巻は、アクリル樹脂（パラロイドB-72）10%キシレン溶液を浸透させ強化した。

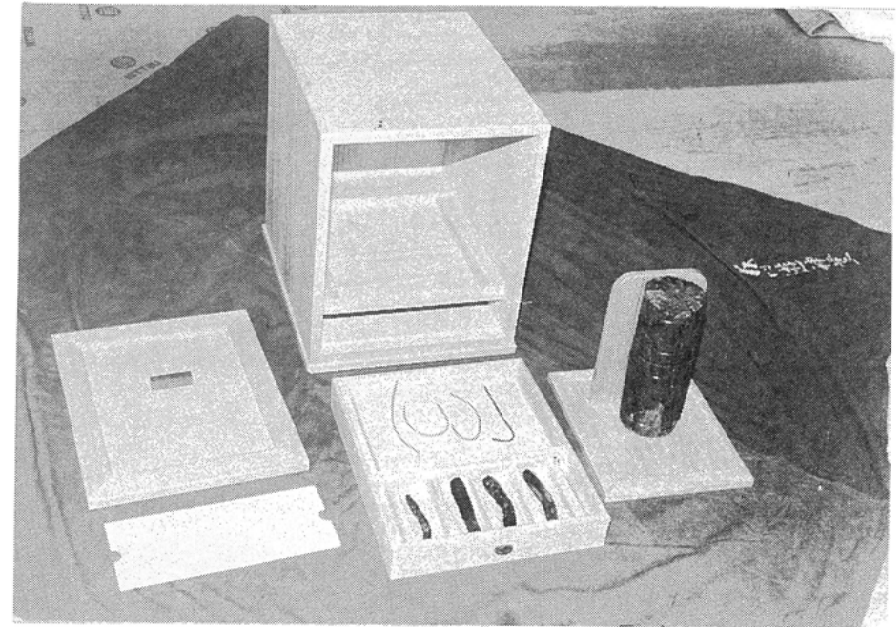
割れていた経筒で接着できるものについては、繊維素系接着剤を使用して復元した。

経 軸

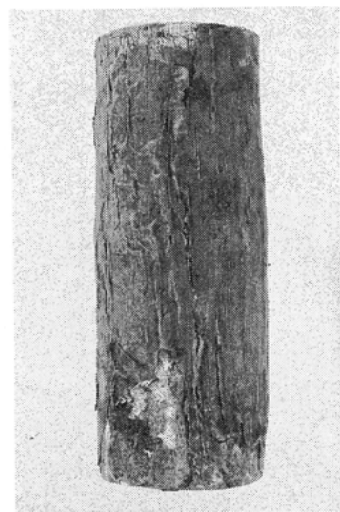
なった経巻は、アクリル樹脂（パラロイドB-72）10%キシレン溶液を浸透させ強化した。

3. さ い ご に

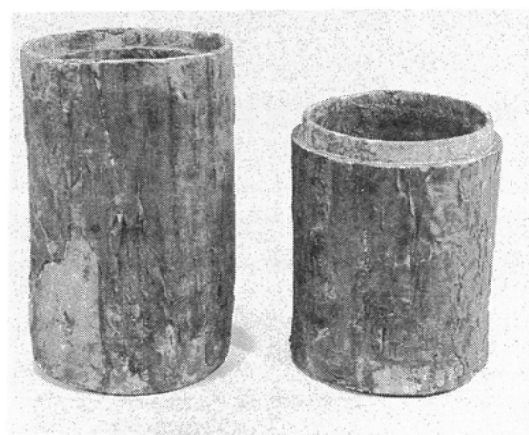
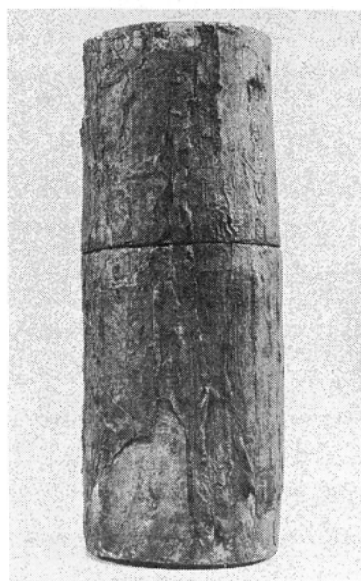
述べたような方法で保存処理を行ったが、経軸など取扱に神経を使わなければならない状態のものもあるので、保存と展示をかね備えるものとして桐箱を製作してその中で保存と展示（第16図）を行うことが出来るように配慮した。



第16図 保存箱に経筒を納めたところ



第12図 保存処理前



第15図 保存処理後

8. 結 言

今回発見された金俣における埋経遺跡は、その出土経筒が木製できわめて稀な例であり、立地条件も特異なものである。年代については、地域の歴史的条件を考慮してこの地で活動した日連宗の日陣上人の事蹟に関連するものとして14世紀中葉と推定した。

経筒が発見された場所は、山麓の火砕岩塊が散乱する岩のすき間であり、通常の経塚が立地する処とはかなり異にするようである。経塚がある場所は、他の場所と異なる霊地である。また経塚が存在することによって、霊地化され聖別されるのである。

例えば村山市河島山は、前面に祖霊が鎮まる葉山がそびえ、すぐ下を最上川が流れ、村々を見晴らす丘陵である。そこには古く古墳が存在し、12世紀には経塚がつくられ、15・16世紀には小型板碑が数十基林立し中世の墓地が展開する。最近調査された白鷹町笠松山経塚や称名寺裏山経塚も中世の墓地が近くにあった。寺社の近くや景勝地に経塚や塔婆が立てられることによって霊地化され、中世墳墓が存在する。人びとが往生を遂げ、極楽に結縁するためには、このような霊地や霊場の近くに葬られなければならなかった。その意味で経塚と中世の墓地は密接な関連がある。

本埋経遺跡も近くに玉龍寺をひかえ村から隔てられた霊地ではなかったのか。古くからあった礫石信仰もこの地を聖別する一つの要素となった。従ってこの辺り一帯が中世のある時期に庶民の墓所であったのではないか。この地に埋経遺跡が存在するのには中世の信仰上の背景があったのである。おそらく埋経遺跡はこれのみでなく、場所を異にして今後発見される可能性があるだろう。

玉龍寺をはじめとした仏教関係遺跡を追求し、地域の霊場の構造を明らかにし、庶民の信仰を総体的に把握することは今後の課題となるであろう。

図

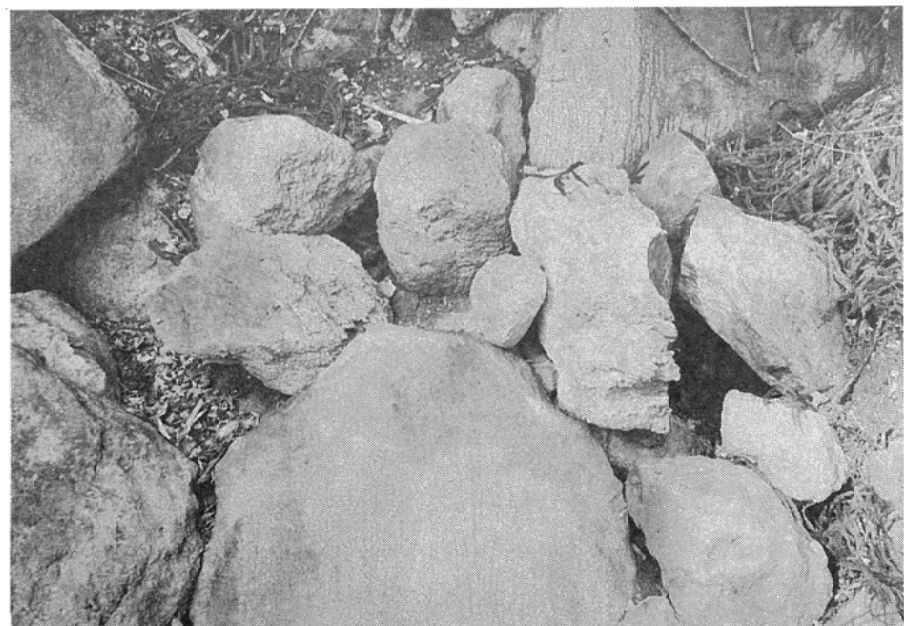
版



図版 1. 埋経遺跡遠景



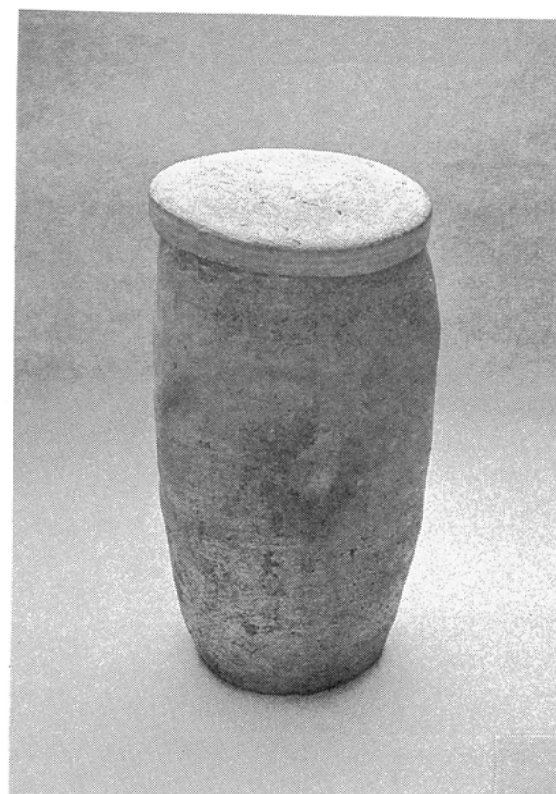
図版 2. 出土地附近遠景



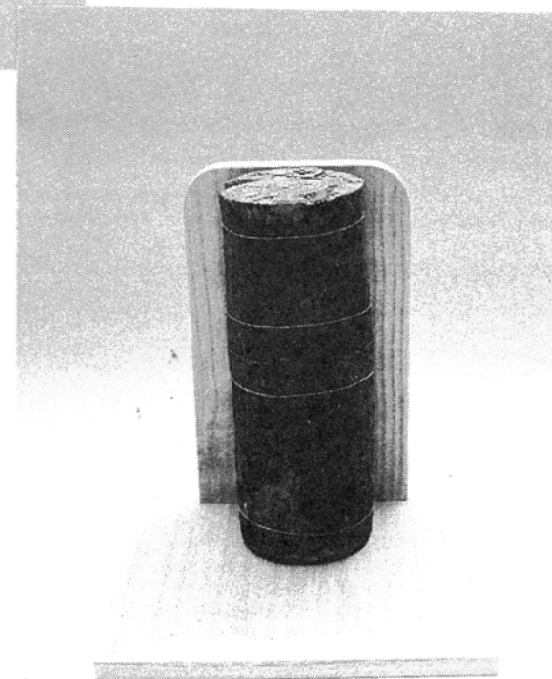
図版 3. 出土地附近石組状況



図版 4. 出土状況



図版 5. 外 容 器



図版 6. 木 製 経 筒

遊佐町金俣経塚（木製経筒出土）

調 査 報 告 書

平成5年3月30日 発行

発行 山形県遊佐町教育委員会

印刷 小 鷹 印 刷 (有)
